



初版『和風金物の実際』(室房吉・稻上文字著 1998 学芸出版社)



改訂版『和風金物の実際 デザインと使い方』(稲上文字・室房吉著 室金物株式会社監修 2013 学芸出版社)

目次抜粋

和風金物見どころマップ

- 一章 和風金物の世界
- 二章 数寄屋の金物
- 三章 町家の金物
- 四章 蔵の金物
- 五章 茶室の役金物
 - 茶事の流れ
 - 広間の茶室と役金物
 - 小間の茶室と役金物
 - 水屋の金物
 - にじり口の金物
- 六章 寺社の金物
 - 扉廻りの金物
 - 蔀戸の金物
- 和風金物リスト

室さんとの出会い

家具屋がたくさん並ぶ京都夷川【えびすがわ】通の町家に室【むろ】金物の古い店舗があった1980年代に、私は初めてその敷居をまたぎました。当時私は数寄屋建築の設計をおもに手掛ける京都の二村【に



むら】建築研究所での修行中。数寄屋建築で使う引き手や特殊な錠前、茶室建築に使う役金物などを求めて室金物をしばしば訪ねていました。

室房吉さん(室金物会長)は、低い軒の薄暗い店の奥からいつも「へいっ、いらっしゃい」と私を迎えくぐって下さいました。目が慣れてくると、室さんの後ろには金物の入った小箱が所狭しと積まれていたことを思い出します。

必要な金物をその小箱の山の中からすぐにコレと選び出し、油紙に包まれた金物を大事そうに広げて見せて下さいました。当時すでに量産品も多く出回っていましたが、数寄屋に使うようなものはほとんどが手作りのもので、どれもこまやかで美しく、衣をまとった宝物のように感じたものでした。

お客さんから要望のあった金物を工夫して作らせ、しかも少し多い目に作ることで少しでも安く、また同じ目的のお客さんに速やかに提供できるようにというのが室金物の信条のようでした。それらが少しずつ積み重なって、非常に古い時代の金物までもが、役に立つ日を箱の中で待っていたように思います。



数寄屋・茶室に使う釘の数々

こうした室さんの、ないものはない、どんなものでも用意します、作らせます、といった心意気は多くの建築家や専門職をはじめ施主さんらを納得させる、そんな店でした。

初版出版へ

こうして室金物の品揃えと室さんの博識は世に知れ渡っていたのですが、そうしたノウハウをそろそろ引き継いでおいてはということになり、先輩建築家(二村和幸さんや成瀬大治さん)の薦めを受け、和風金物の知恵をぜひ本にしようと、1995年の阪神淡路大震災の頃から本の制作に入り、室さんと二人三脚、在庫しているありとあらゆる金物についての拾い出しを始めました。

初版の目玉は茶室金物の解説でした。当時数寄屋・茶室設計のための茶道研修は私の役割でしたの

で、その経験を生かして、茶室の役金物の種類と用法を茶事の流れにプロットしていきました。仕事や取材、茶事でお世話になった、兵庫県三田『半宝庵』、長崎諏訪荘『聴松庵』、東京野毛『青松庵』が主にそうした解説の舞台となってくれました。

その他の膨大な種類の金物については室さんがすでに分類・整理をされていましたので、その用法のわかる建築写真を収集し、建築のカテゴリーに合わせて構成するのが私の役目でした。西澤文隆さんのライフワーク『実測』や「建築のこころ」取材（大阪建築士会会誌『ひろば』）で古建築を巡った経験を生かし、そこに設計事例を織り込むことで単なる用法解説に陥らないよう建築との調和を表現できるように心がけ、取材・執筆・撮影・図版作り・頁割り・レイアウトが進んでいきました。

編集過程では、学芸出版社の編集藤谷さんの助言により、ノウハウ本にとらわれない室さんの人生をにじませることで金物もいっそう生きるのではとの構想を取り入れ、初版を出版したのが1998年でした。

初版本の作成中、当時二村事務所のアルバイト学生だった岩崎康くん（現：岩崎建築研究室）が金物屋の休憩室のテーブルで細やかな金物の実測スケッチを連綿と手掛け、吉田幸代さん（現：京都市立芸術大学）、豊永政史くん（現：京都精華大学）が金物のスタジオ撮影や金物製作現場のロケ、ビジュアルデザインを請負ってくれました。

古建築を中心に主要な建築写真は著名な写真家相原功さんが協力してくださり、二村事務所の施主にも協力を仰ぎ、いよいよ最後に上野かおるさんが本の衣装として華やかな装丁をデザインしてくださり、出版となりました。初版はわずか5年で完売に至りましたが、同時に絶版も決まったのでした。

そんな中2000年には『町家再生の技と知恵-京町家のしくみと改修のてびき』（京町家作事組編著 2002 学芸出版社）の本作りに参加させていただきました。町家に関わる全種類の職人にヒアリングしながら町家普請をなぞり、町家の特性を知り再生に生かすことめざした本で、それまで身近すぎて案外何も知らなかった「京町家」を再考するいい機会を授けていただいたことは後の改訂版の「町家の金物」に生きてきます。

ヘリテージマネージャー誕生

数々のご功績を残された室房吉さんが亡くなられたのは2006年、世の中には新しい風が吹き始めていました。

スクラップ&ビルドの時代を反省し、日本の歴史的な環境を守り、広く活用していこうではないか、

また安易に新しいものに更新させるだけではなく、今一度目の前にあるものに眼を向け、昔からそこにあるものの意味を問い、ものからひと、そしてまちづくりへと広がりをもった価値観を地域で共有しようとの動きです。

1996年に施行された「文化財登録制度」が徐々にですが建築界の歴史的建造物への覚醒を促しました。この登録制度は「近年（中略）、社会的評価を受けるまもなく消滅の危機に晒されている多種多様かつ大量の近代等の文化財建造物を後世に幅広く継承していくために作られたもの」（文化庁）とありHMの皆さんなら周知のことです。

改訂版出版へ

私個人も2005年に兵庫県ヘリテージマネージャー（HM）四期として登録し、青いながらもHMとして何か自分にできることをと模索していました。初版出版後、金物という「小さな窓」から「大きな建築」を語れたらとの構想を胸に、手掛かりになる写真や資料が集まり出したことをきっかけに、最初は日々更新・発信できるウェブサイトと連携した「電子書籍・和風金物の実際」出版の相談に学芸出版社を訪れたのでした。

2010年当時、日本での電子書籍はまだまだ採算ベースにのっておらず、学芸出版社でも試験的に配信している状況でしたので、いっそ紙の実本（改訂版）を出してはと逆提案をいただいたのでした。こんな幸運を得て本格的な改訂版作りの緒に就きました（今も電子出版の構想は続いています）。

初版当時、テキストはデジタル入稿でしたが製版はまだアナログの時代でしたので、まずは過去のフィルム写真のデジタル化（スキャニング）、次にスケッチの増量が大仕事でした。台割りや構成・レイアウトは編集ソフトを使いながら下編集をし、最終的にイメージ、テキスト、PDFの各ファイルで入稿に至りました。

執筆作業の終盤に、マーケットを分析した結果、出版社企画からの方針変更がありA5版からB5版に大きくし、ターゲットをデザイナーユースにややシフトすることになりました。結果、口絵や装丁イメージ、サブタイトルに大きく影響し、筆者としての大きく戸惑うこともありました。

改訂版に際し、今度は室金物社長（房吉さんのお孫さん）の監修と協力を得、再び名建築の写真を相原功さんから提供いただきました。

学芸出版社さんと本作りを進める中、産休中も継続的にご助言・励まし下さった永井さん、緻密な編集に注力いただいた同社越智さん、「今、誰に何を」伝えるべきかを啓示し、内容に渴を入れてくださっ

た同社企画の井口さん、表紙や口絵の写真撮影と一緒に町を歩いて下さった建築家松本崇さん(みささぎ)、装丁のデザイナー山本剛史さん(KOTO DESIGN)といった布陣があって初めて今回の本ができあがりました。

誰の手・目も本作りチームとして欠くことのできないものであったのです。



奈良町家駒寄せの引き寄せ金物「カーリー」



妖美極まれり 大徳寺「乳金物」

取材について

初版時には古建築の写真の多くを相原さんや二村さんに頼っていたのですが、今回は自分の目と足で各地を訪ね、掲載している金物の多くを拾い上げました。私の体力では重い一眼レフはあきらめ、そのかわりフットワークよく数多く撮ることにし、軽いコンデジを使いました。屋外では気まぐれな光線、屋内では暗い中、膨大なミスショットの山が今もHDDに残っていることは想像に難くないと思います。

取材先として、明治村(岐阜・犬山市)や東京たても園(東京・小金井)、大阪くらしの今昔館(大阪・天神橋)などの博物施設は非常に役に立ち、何度も足を運びました。また、奈良県人としてぜひ大和らしいものをお願い、大和の町場や寺社を多く歩きました。存外いいものが発見できたことに「奈良

再発見！」と感動したことはいうまでもありません。また、執筆中に建物調査で赴いた山口県や、知人の縁、そして尊敬する中村外二さんの故郷ということで訪れた北陸での金物も地域文化(お酒やたべもの)とともに脳裏に焼き付いています。

こうして気ままに「町並みホッパー」ならぬ「金物ホッパー」しているうちに、少しずつ伝えたいものをしぼりながらまた次のターゲットに向かうという具合にあつというまに三年がたったように思います。

学術性に重きをおいたわけではないのですが、行き詰まったら図書館、そして文化財修理報告書の中で専門家がどのように古金物に関わっていたかを知る機会を持てたことは大きな収穫で、今もそれは仕事の糧となっています。

こうした取材と試行錯誤は、初版にはなかった「数寄屋」と「町家」を新しいカテゴリーを作りだし、HM的な目線で歴史的建造物の保存・活用の中でもいかにさせるよう、また和風金物のきらりと光る姿をデザインソースとしていかしていただけるよう写真や図版も増やし、金物リストも大きく更新することになりました。

無惨、料亭『播半』



播半の茅葺き門(1991年頃)写真 相原功



播半跡地 工事中の公園 (2014年1月)

初版から改訂版にかけての15年間にこの本に関わる大きな出来事が起きました。本の中「数寄屋の金物」で登場する料亭『播半【はりはん】』です。

『播半』は、播磨出身の平山半兵衛が大坂心斎橋に開いた料亭がルーツで、大正の終わりに5代目由之助が阪神間の奥座敷のひとつ西宮甲陽園に開業した料亭です。由之助は大病の後「死にあばれにまた好きな普請をする」と称して、お気に入りの職人「柳やん」と「清やん」とともに建てた壮大な数寄屋絵巻のような建物でした(詳しくは「和風建築」建築資料研究社1991.12~92.2月号)。

ところがバブル崩壊後の経営悪化で廃業を余儀なくされ、そこで湧き起こったのがマンション建設計画(2007年)です。

いつも湿した新聞紙で掃き清められていたはずの簾敷の廊下を土足で住民説明会会場に案内された時を最後に、そこからあとは手をこまねいて何もできずにいる私たちヘリテージマネージャーの目の前で解体されマンションへと姿を変えました(他に複数の活動もありました)。

播半には上記『和風建築』取材にも通り、また播半の離れ座敷のひとつ『芳樹軒』の移築にも関わりました。そんな中で室金物『室』の刻印の入った金物に遭遇し、後には故澤良雄さんらが登録文化財調査結果登録未達に終わった物件でもありました。また重ねてマンション建設の開発協議(西宮市)の過程で、播半の茅葺き門などの移築保存の設計依頼の打診を受けた(受託せず)という、とても因縁深い建物でもありました。

本の中では、ありし日、現役の播半がいきいきと写っていますが、まさに時代の流れに翻弄されその行く末を結果的にヘリテージマネージャーが見過ごした物件として忘れられない建物となりました。

本作りとヘリマネ事案を照らし合わせて思うことは、ひとりではなにもできないが、いろんな方の力を持ち寄ることで本を出版できたということであり、多方面に連携できないといかにHMひとりでは弱いかと言うことです。恥ずかしながら常に私の歩いた後には反省の山がうずたかくできあがって

いるのですが、そんな中の今般のうれしい出版であったことで、関わった皆様に感謝の言葉を申し上げたいと思います。



唐紙と引き手 川西平安邸「舞鶴」



用の美 京都角屋「ぱったり床几と鉾」

「ほんまもん」なき時代へ

初版から改訂版出版の15年の間にもうひとつ気になるのは、短い間に金物の業界も縮小し、その結果選択肢も狭まり、形式的な意匠のものが増えたことです。丹念に創られた手作りの「ほんまもん」が明らかに減ってしまったのです。

錆びたり変色したりした「ほんまもん」の金物は、どうしてこの金物・意匠がここで使われたのか、だれがつくったのか、つくらせたのかといったことに想像力を働かせる力があります。が最近では欠けたり傷んだりした部分を補う工業製品の金物が多くなり、残念な場面に出くわすことが増えました。質的にも意匠的にも今人は先人にはかなわないのでしょうか。

そうした思いの中、金物行脚で学んだことが巡り巡って設計者としての我が身の仕事に鉄槌を下されることのないよう、身の引き締まる思いで今後も「ほんまもん」を探し、「ほんまもん」を創る旅は続いていくと思います。

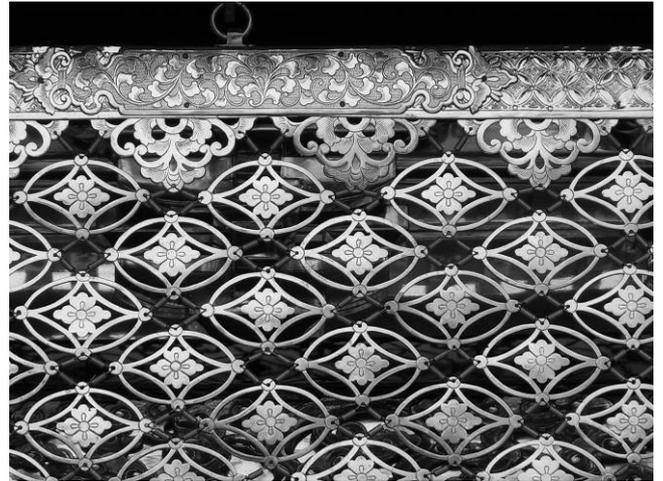
室さんの教え

室さんの言葉を思い出します。

金物について尋ねると「へい、へいっ」と、私のような若輩のもの言うことにでも、親身に耳を傾けてくださりながら、「まあ、聞き、おっさんのいうこと。こういうときはなあ・・・」と、広告や書き損じをメモ紙にしたものに、鉛筆でつらつらとスケッチを始めて、講釈師のような呪文のような口調で細かく金物の使い方、取付け方を教えてくださったものでした。

ときには抹茶を点【た】てて下さり、「わかったからというて、えらそうにしたらあかんで。若いモンはなあ、知ってるからいうて、ひけらかしたらいかん。そうしてて、誰にも負けんよう、よう勉強して、何でも知ってて、そんで、なんでも感謝と真心中で」とおっしゃったのでした。

年は四回り違いですが、同じ奈良県人として、忘れてはならない、ありがたい教えです。



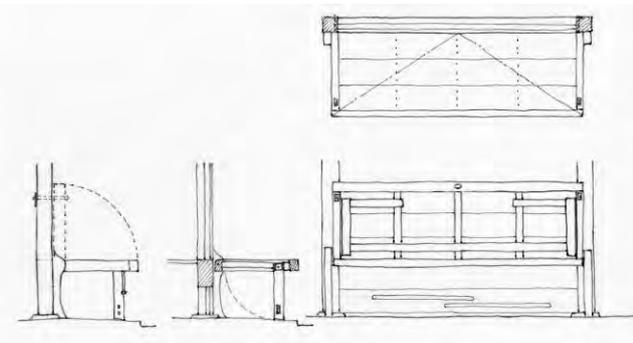
天神祭の神輿飾り 「七宝唐草」



四天王寺元三大師堂 落しのつまみ 「蟬」



京町家の郵便受け 「LETTERS」



ぱったり床几のしくみ

最後に

今後の電子書籍化への足がかりとしてWebsite「和の住まい設計」で試行錯誤をしています。HM活動を含め、金物についても随時更新しておりますので何かの参考になれば幸いです。

最後にお願ひです。

全国のヘリマネの皆さん、日頃の仕事やHM活動のなかで、ほれぼれするような金物や珍金物、デザイン意図に疑念のある金物などに会われましたら、ぜひ一緒に考えてみたいのでご連絡ください。

兵庫県ヘリテージマネージャー4期 稲上文子

和の住まい設計/和風金物の実際

<http://www.kazabito.com>

お探しの金物がきっとみつかる-室金物株式会社

<http://www.murokanamono.co.jp>